

会 長 挨 拶

「きく」ことの意義

明治大学教育会 田中 徹太郎

ただいまご紹介に預かりました田中徹太郎でございます。皆様方から日頃より多くのご芳情を賜り心より感謝申し上げます。開催にあたりご挨拶申し上げます。

教職では、日々良き話し手を目指しますが、コミュニケーションの専門家は、「話し言葉教育は、話すことでなく聴く訓練から始めなければならない」（『きき方の理論』斎藤美津子著サイマル出版）と主張しています。

斎藤先生は、「きく」ということは先天的なものではなく訓練によってのみ身につくコミュニケーションの技術であるとし、次のようにその特性を述べています。

- ① 人の話を聞くことは、相手を人間として受け入れることであり、民主主義の基本精神そのものである。
- ② 「きく」ことは人のためにきくのではなく、学ぶため、人間成長のため、自分自身のために「きく」のである。
- ③ 「きく」ことの訓練は、知識の導入だけではなく、人間に対する忍耐と理解の精神を養うための近道である。
- ④ 子供達の「注意集中」の訓練にもなると同時に、批判的な考え方を涵養する最も手取り早い方法である。

ミヒヤエル・エンデ作「モモ」には、「小さなモモにできたこと、それは他でもありません、相手の話を聞くことでした。～本当に聞くことのできる人は、めったにいないものです。～ただじっとすわって、注意ぶかく聞いているだけです。その大きな黒い目は、相手をじっと見つめています。するとあいてには、じぶんのどこにそんなものがひそんでいたかとおどろくような考えが、すうっとうかびあがってくるのです。」

コミュニケーションの分野では、話し言葉は、聞くことの訓練から自己の創造性開発を始め、また深めていくとされています。昔から「聞き上手」と言われていますが、「人の話をきく」ということは、非常に積極的で建設的な行動であり、努力と忍耐を要する難しい仕事です。自分を空っぽのコップにするには、人間尊重の態度、そして努力と忍耐強さが求められます。良い聞き手は、即座に自分勝手な結論を出すのを差し控え、じっと黙って聞いています。目も口も全ての感官を総動員して体全体で話し手に協力します。

いかに話すかに熱心で「きく」ことを忘れてしまう危うさを私たちは、肝に銘じましょう。

本日の会合が皆様にとりまして、有意義なものになりますよう祈念申し上げます。本日は、ご多用の中ご参加いただき、心より感謝申し上げます。